日本工業大学 通信

NIPPON INSTITUTE OF TECHNOLOGY

第118号

平成14年（2002年）11月1日発行

編集・発行
日本工業大学
広報課
〒345-8501 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1
☎(0480)34-4111(代)
http://www.nit.ac.jp

第34回「若杉祭」11月2～4日に開催!!

親子ものづくり教室

去る8月3日（土）、スチューデントラボにて「第2回 親子ものづくり教室」が開催された。この教室は、小学生とその保護者を対象に、「ものづくり」の実体験を通し、その楽しさや、新しい発見をすることを目的としており、親子合わせて68名が参加した。

「親子ものづくり教室」では、未経験者でも容易に「ものづくり」に取り組めるよう、あらかじめ複数のテーマを用意してある。今年のテーマは、5つ。木工の「ピクニックチェアーを作る」、「切りぬき動物を作る」、電子工作の「ゲルマニュウムラジオを作る」、「クリップモーターを作る」、そして紙工作では「紙飛行機を作る」である。受講者は、それぞれのテーマに分かれ、本学教職員の指導のもと、「ものづくり」を楽しんだ。

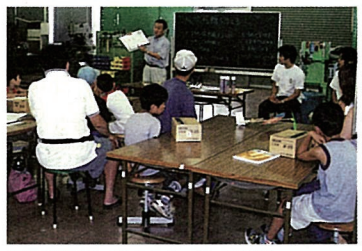
原センター長の挨拶で始まった本教室だが、いざ作業を開始してみるとなかなか思い通りにはいかず、中には主役である子供よりも、親の方が真剣になって取り組んでいたり、やっと完成間近になった作品が最後の最後で不具合になってしまい、もう一度やり直したりと、各人「ものづくりの苦労」もしっかり体験していたが、苦労した分、作品が完成した時の喜びも、またひとしおで、あちらこちらで「できた！」という歓声があがっていた。また、選んだテーマが早く終わってしまい、再度、別のテーマに取り組み、2、3作品を仕上げているつわものの親子もいた。

コンピューターゲーム世代の子供達ではあるが、ゲームのコントローラーと同じくらい器用に工具を扱う子供もいて感心させられる場面もあった。

教室終了後、参加した子供たちは口々に「来年もこの教室は開かれますか？開かれれば絶対に来たい！」と言葉を残し、一日がかりで作った労作を大切に抱え、会場を後にしていた。

（用度・管財課　鈴木良裕）

小型バンドソウで注意深く動物の絵を切り抜く



講座の説明をするセンター長・原教授

でき上った作品を手ににっこり

親子ものづくり教室を開催して

スチューデントラボ　土野一清

親子ものづくり教室は本学の地域社会への貢献の一環として、大学が提唱する「感性とものづくり」という大きなテーマの中の、「ものづくりを通して心豊かな人間を育てる」ことを目的としてスタートしました。今年は第2回目となったため、応募者および参加者数が昨年度に比べ増加しました。このことは地域の方々に教室が認知されてきたためかと関係者一同喜んでおります。

この教室は杉戸町と宮代町の小学生を対象とし、木工教室・理科教室・紙工作教室で構成されています。内容はスチューデントラボ運営委員の先生方がいろいろ知恵を絞り、考えてくれました。木工・理科・紙工作の各教室でのテーマ創りにおいては「いかに子供たちの視点でものづくりをするか」を第一に考え、「飽きさせないで楽しくものづくりをする」をコンセプトにしました。今後の計画の参考のために教室参加者の方々にアンケートをお願いしましたが、アンケートの結果でもおおむね好評でした。

本部として実施にあたり一番心配したことは参加した子供達の「ケガ」です。「ケガ」や「事故」を起こさせないために、テーマの内容や参加者数に対応できるように、本学学生のアルバイトによる充分なサポートの人数をつけました。おかげで「ケガ」が無かっただけでなく、きめ細かい指導が出来たので参加者からも好評のようでした。勿論、万が一「ケガ」をしてしまったときのために、密かに参加者全員に傷害保険をつけておきました。一方サポートをしてくれた学生にとっては、「人に教えることのむずかしさ・楽しさ・喜び」を体験してもらえたものと、もう一つの目的についても満足しています。

来年も又来たい、と言っていた参加した子供たちの笑顔を思い浮かべながら、現在次のテーマの検討に取りかかっています。

工学部13名、大学院4名、留学生別科に54名
平成14年度秋季入学式が行われる

本学では、大学の国際化や社会情勢の多様化に対応するため平成10年度より学部、大学院および留学生別科について秋季に入学・卒業式を行っているが、平成14年度秋季入学式が10月1日、情報工学実験棟5階会議室で行われた。

今回の入学者は、工学部13名、大学院博士前期課程4名の計17名であり、また留学生別科に54名が入学した。

1名除き外国籍。工学部、大学院入学者

工学部と大学院入学者17名のうち日本国籍を持つものは粟村大君だけで、他の16名はいずれも外国籍の入学者である。内訳は、外国人留学生試験に合格して学部1年次への入学者が1名、学部編入試験に合格し3年次への編入者が2名、留学生別科日本語研修課程を修了し学部1年への推薦入学者が9名、大学院4名で、ほとんどが中国国籍であるが、うち一人は台湾出身である。

カナダで勉強し3年次編入、日本国籍の粟村君。

日本国籍を持つ粟村君は、本学と交流協定を結んでいるカナダ・アルバータ州立レスブリッジ・コミュニティ・カレッジの総合課程を修了して、機械工学科3年次に編入が認められたものである。

バラエティに富む留学生別科入学者

留学生別科入学者の国籍は、カナダ、台湾が各1名、バングラディッシュ15名、その他は中国籍である。

留学生別科修了生の進路は多様

なお、入学式に先立ち9生別科に在籍する者4名、本学の研究生になる者3名、経済専門学校5名、女子短大1名、未定3名であった。

社会へ巣立つ19名の学位取得者

また、9月20日に平成14年度秋季学位記授与式が行われた。工学部18名、大学院博士前期課程1名の合計19名が卒業した。各学科の内訳は、機械工学科2名、電気電子工学科3名、建築学科4名、システム工学科3名、情報工学科6名である。

学長のことば

学長からは、健康に留意すること、社会人になることへの心構え、今まで育ててくれた親への感謝を忘れないこと、そして、人生を分かち合う伴侶を得て幸せな人生を送ってほしいとのはなむけの言葉があった。

学長式辞、理事長祝辞

学長からは、本学の教育基本理念である体験学習を身につけ、実行し、健康で実りある学生生活を送ってほしいとの式辞があった。

また理事長は祝辞の中で、「感性」に触れ、工学的な感性とは、工学の知識と経験の融和から生まれるものなので、目標を明確に設定して勉強をし、同時に感性を磨いてほしいとエールを送った。

秋季入学式で祝辞を述べる理事長

留学生別科卒業式で謝辞を述べる刘志国君

月末には留学生別科と本学の秋季卒業式が行われた。

留学生別科は、9月27日、28名が修了。国籍はスリランカと台湾が各々1名、他26名は中国籍である。卒業後の進路は、本学への進学以外に来年の3月まで留学

工業技術博物館 第12回 特別展

鍵と錠の歴史とメカニズム

工業技術の目的の一つが、安全社会の実現です

＜展示内容＞

エジプト錠・二上外次郎の錠（覚眼器付）・現代のバイオセンサー錠・二上敏夫氏所蔵「錠と鍵のコレクション」など

＊開催期間　11月2日（土）～11月30日（土）
＊場　所　日本工業大学 工業技術博物館2階
＊入 場 料　無料

＜講 演 会＞

＊これからのホームセキュリティ［ドロボーの現況と防犯対策］
講師：元警視庁刑事・防犯アドバイザー　稲田淳夫 氏

＊日時　11月21日（木）午後1時20分より3時まで
＊場所　日本工業大学　学友会館　ホール

主催　日本工業大学 工業技術博物館
TEL：0480-33-7545（博物館直通）

日本工業大学　工学部

●機械工学科　●電気電子工学科　●建築学科　●システム工学科　●情報工学科

■日本工業大学　平成15年度入試日程

	出願期間	試験日	試験内容	合格発表	入学手続締切
一般入試	1月10日～2月5日	2月12日 2月13日 2月14日 （受験日自由選択制）	全学科 全学科 全学科	2月20日	2月28日
社会人入試	1月10日～1月22日	2月14日 書類審査による第1次試験の合格者のみ受験可能。第1次試験の合格発表は1月25日	小論文及び面接	2月20日	2月28日
帰国子女入試	1月10日～2月5日	2月12日	書類審査及び面接	2月20日	2月28日
AO入試（第2期）	11月25日～12月2日	12月7日 12月8日 （受験日はいずれかを大学が指定）	面談、課題への取り組み	12月14日	12月24日 1月20日
AO入試（第3期）	2月20日～2月28日	3月5日	面談、課題への取り組み	3月12日	3月19日

日本工業大学　大学院工学研究科　博士前期課程・博士後期課程

●機械工学専攻　●電気工学専攻　●建築学専攻　●システム工学専攻　●情報工学専攻

本学で先端技術研究の取り組みを

社会人大学院生 募集！（日本工業大学大学院　社会人特別選抜）

◆平成15年度　大学院　社会人特別選抜入試日程

	出願期間＊1	試験日	試験内容	合格発表	入学手続締切
二次募集	2月8日～2月18日	2月25日	書類選考・面接	3月5日	3月12日

願書のご請求およびお問い合せ先：教務部教務課　大学院入試係　TEL0480-33-7507（直通）

願書のご請求およびお問い合せ先
〒345-8501　埼玉県南埼玉郡宮代町学園台4-1　日本工業大学教務部　入試室
TEL0120-250-267（フリーダイヤル）　0480-33-7676（直通）
URL：http://www.nit.ac.jp/　E-mail：nyu-shi@nit.ac.jp

海外研修で多彩な経験

教務課主催のカナダ英語特別セミナー、学生課主催のヨーロッパ研修が行われ、それぞれ実り多い経験をしたという報告があったので、ご紹介する。

CANADA 英語漬けの生活を満喫

共通系助教授　市川　泰弘

平成14年度、第20回カナダ英語特別セミナーは9月11日に無事終了した。今回の参加者もそれぞれ貴重な体験と3週間の英語漬けの生活を満喫したようだ。当初、生活で使う言語が英語という環境は英語嫌いの学生たちには苦痛であったかもしれないが、1週間経ち2週間経つと逆に英語の中での生活が当たり前となり、いつしか英語が嫌いという感情が薄まっていった。

その最大の原因は環境とUBC（ブリティッシュコロンビア大学）のELI（英語研究所）のスタッフのおかげである。特に今回担当してくれた講師（Ms. Teresa McPhee）は実は11年前に私が担当したカナダ英語特別セミナーの際のELIのスタッフで、かつ現在のスタッフを育てた方だったのである。さらに、彼女は15名全員に対し個人面接を行い、各自の希望や目標を聞き、それに基づいて3週間のカリキュラムを作成してくれた。そのため、学生は講義に興味を持ち続け、病気で1日欠席した学生以外は全員が休むことなく講義を受けたのである。

学生自身が信じられないと言っていたことだが、全ての学生が講義開始（9時）の30分前には教室にやってきて、コーヒーを飲みながら、宿題のことや前の日の出来事などを話しているのである。講義開始5分前にはそこへ担当講師がきて、学生と英語で雑談をする。学生の学ぶ姿勢、教員の教える姿勢を私自身もう一度見直す機会となったことは言うまでもない。

●シーカヤックに乗る

EUROPE 歩き通した歴史都市

システム工学科専任講師　北久保　茂

本年度のヨーロッパ研修は9月5日～17日、学生8名（男女各4名）、副団長吉川寿子さん（就職課）および添乗員の計11名が4都市を巡りました。成田空港での結団式では緊張気味だった面々も、最初の訪問地アテネに到着する頃には、真夜中にも拘らずホテルの屋上で夜景を楽しむ余裕が出て来ました。翌日の半日観光では、2年後のオリンピックに向け建設改修ラッシュで、足場の組まれたパルテノンに神々の姿を感じるのは困難でしたが、ギリシア料理を堪能して旅の幸先に乾杯しました。

8日にローマに到着し、バチカンを含む石造りの都市が現在も使われつつ維持されているのを目の当たりにして、建築学科の7名を始めとした一行は真剣にカメラを構えておりました。

11日に訪れたロンドンでは英語が通じる気楽さもあって行動範囲が広がりました。日本とはシステムの異なるバスや地下鉄も利用し、博物館巡りや買い物を楽しんだようです。

14日からのパリでは、数々の見所を擁する市内をくまなく歩いたり、美術館をハシゴするなど、最終訪問地でも貪欲に文化を吸収する姿が見られました。

自由行動が多かった一方、団体行動ならではの思い出を作ることのできた13日間であったと思います。

●ノートルダム寺院の前で記念撮影

第35期決算・第36期予算

日本工業大学の財政状況について

一、はじめに

第三五期決算・第三六期予算が公認会計士及び法人監事の監査を受け、法人理事会・評議員会で承認決定されましたので、ここに財務諸表を公表し、関係各位のご理解とご協力をお願いする次第です。

私学を取り巻く環境は、十八歳人口の急激な減少、文部科学省の規制緩和・補助金行政の変化など厳しさを増し、競争が激しくなる傾向にあります。このため、学校法人の運営の舵取りが大変難しい局面下にありますことは、ご高承の通りであります。

このような状況下、本学が今後とも安定した教育研究環境を維持継続していくためには、常に教育的・財政的側面を見直し、教育プログラム改革の推進とそれをサポートする財政基盤の一層の充実を実現していく事が益々重要になっております。

現在、本学では平成十五年度において、（財）大学基準協会による第三者評価を受けるため、「自己点検・自己評価」に鋭意取り組んでおります。この取り組みは、教育研究活動の状況を継続的に点検ならびに評価し、教育研究水準の向上に資するために行っているものであります。この結果については公表することを予定しております。

この様な取り組みを含め、今後とも、教育研究環境の改善のための努力を重ねて参る所存であります。

二、平成十三年度決算について

学校法人の主たる財務諸表には、全ての資金の流れとその顛末を示す「資金収支計算書」、各年度における収支の均衡状態や財政の健全さを見る上での指標となる「消費収支計算書」、決算時点における財政状態を明らかにした「貸借対照表」の三表があります。大学部門の決算内容につきましては、それぞれ別表1から別表3の通りであります。また、「資金収支予算書」を別表4として、さらに、別表5に「消費収支計算書主要項目の分析表」を添付しております。

（消費収支計算書）

○消費収入の部について

主たる収入源である学生生徒等納付金は、学生数の増加により前年対比二・二%の増加となりました。手数料収入は、受験者数漸減の影響が見られます。補助金は前年比微増となりましたが、増加要因は研究設備・研究装置補助金が前年に比べ多く採択されたことによります。資産運用収入の減少は、長引く超低金利の状況を反映しております。雑収入は前年度に比べ退職者数が減少し、私立大学退職金財団からの交付金が減少したことによるものです。

○支出の部について

人件費は人員増などにより前年対比〇・八%と若干増加しておりますが、人件費依存率（学生納付金収入に占める人件費の割合）は四五・二%で、抑制的に対処致しました。教育研究経費は前年対比〇・四%増加しており、教育研究の質の充実が図れたと言えます。管理経費はISO一四〇〇一認証取得・維持経費および広報関係の支出が増加しました。

三、平成十四年度予算について

（資金収支計算書）

○収入の部について

平成十四年度予算は別表4の通りであります。

収入の中心である学生納付金収入は、当年度も学費据置を継続いたしましたので前年比微増の予算と致しました。また補助金収入については経常費補助金の減少傾向を受け、前年対比一四・三%の減少を見込んでおります。手数料収入は受験者数の減少傾向を受け、また資産運用収入については低金利下の状況を鑑み、それぞれ昨年に引続き、前年より減少を見込んでおります。雑収入は退職者数の増加により私立大学退職金財団からの交付金収入が見込まれるため増えております。

○支出の部について

人件費は退職者が増えるため六・〇%増加しております。教育研究経費および管理経費は、総額では教育研究経費が三・七%増の十八億円、管理経費が九・七%増の四億円とし、特徴ある教育研究実現のため昨年に引続き重点的な予算配分を致しました。

四、むすび

冒頭で申し上げましたように、私学を取り巻く環境は大変厳しい状況にあります。現在推進中の「自己点検・自己評価」結果などを踏まえ、より一層魅力ある大学として、教育研究面の充実を図ると共に効果的な経費の使い方を行う財政運営に努めてまいる所存です。

本学の教育改革、財政運営に対する学校関係者の皆様のご支援ご協力を重ねてお願い申し上げます。

（財務部）

（別表1）資金収支決算書　単位：千円

科目	H13年度	H12年度	増減
収入の部			
学生生徒等納付金収入	6,860,408	6,713,531	146,877
手数料収入	72,097	73,551	△ 1,454
寄付金収入	131,050	125,093	5,957
補助金収入	716,081	700,047	16,034
資産運用収入	67,518	350,804	△ 283,286
資産売却収入	0	31	△ 31
事業収入	56,971	68,938	△ 11,967
雑収入	26,519	117,405	△ 90,886
借入金等収入	0	0	0
前受金収入	3,032,708	2,930,862	101,846
その他の収入	216,354	802,236	△ 585,882
資金収入調整勘定	△ 3,112,107	△ 2,916,796	△ 195,311
前年度繰越支払資金	5,358,491	4,273,743	1,084,748
収入の部合計	13,426,090	13,239,445	186,645
支出の部			
人件費支出	3,014,000	3,055,092	△ 41,092
教育研究費支出	1,559,483	1,486,216	73,267
管理経費支出	326,164	295,064	31,100
借入金等利息支出	183,892	201,151	△ 17,259
借入金等返済支出	383,040	600,260	△ 217,220
施設関係支出	170,291	168,794	1,497
設備関係支出	645,870	448,020	197,850
資産運用支出	1,649,065	1,347,911	301,154
その他の支出	411,857	368,971	42,886
資金支出調整勘定	△ 94,263	△ 90,525	△ 3,738
次年度繰越支払資金	5,176,691	5,358,491	△ 181,800
支出の部合計	13,426,090	13,239,445	186,645

（別表2）消費収支決算書　単位：千円

科目	H13年度	H12年度	増減
収入の部			
学生生徒等納付金	6,860,408	6,713,531	146,877
手数料	72,097	73,551	△ 1,454
寄付金	133,523	133,835	△ 312
補助金	716,081	700,047	16,034
資産運用収入	67,518	350,804	△ 283,286
事業収入	56,970	68,938	△ 11,968
雑収入	26,924	118,353	△ 91,429
帰属収入合計	7,933,521	8,159,059	△ 225,538
基本金組入額合計	△ 635,635	△ 906,906	271,271
消費収入の部合計	7,297,886	7,252,153	45,733
消費支出の部			
人件費	3,100,250	3,076,840	23,410
教育研究経費	2,749,455	2,739,214	10,241
管理経費	362,148	329,990	32,158
借入金等利息	183,892	201,151	△ 17,259
資産処分差額	37,634	165,021	△ 127,387
その他の支出	277,915	270,940	6,975
消費支出の部合計	6,711,294	6,783,156	△ 71,862
当年度消費収支超過額	586,592	468,997	117,595
前年度繰越支出超過額	△ 7,761,109	△ 8,230,106	468,997
翌年度繰越支出超過額	△ 7,174,517	△ 7,761,109	586,592

（別表3）貸借対照表　単位：千円

資産の部			
科目	H13年度	H12年度	増減
固定資産	30,410,270	29,208,227	1,202,043
有形固定資産	23,453,549	23,896,267	△ 442,718
その他の固定資産	6,956,721	5,311,960	1,644,761
流動資産	5,400,987	5,575,768	△ 174,781
合計	35,811,257	34,783,995	1,027,262

負債・基本金・消費収支差額の部			
科目	H13年度	H12年度	増減
負債の部	9,154,573	9,349,539	△ 194,966
固定負債	5,539,615	5,822,775	△ 283,160
流動負債	3,614,958	3,526,764	88,194
基本金の部	33,831,201	33,195,565	635,636
翌年度繰越消費収支差額	△ 7,174,517	△ 7,761,109	586,592
合計	35,811,257	34,783,995	1,027,262

（別表4）資金収支予算書　単位：千円

科目	H14年度	H13年度	増減
収入の部			
学生生徒等納付金収入	6,709,829	6,708,513	1,316
手数料収入	68,600	68,500	100
寄付金収入	92,900	87,000	5,900
補助金収入	521,135	608,330	△ 87,195
資産運用収入	10,000	18,550	△ 8,550
資産売却収入	0	0	0
事業収入	42,107	39,399	2,708
雑収入	157,255	17,706	139,549
借入金等収入	0	0	0
前受金収入	2,723,528	2,595,132	128,396
その他の収入	590,351	244,202	346,149
資金収入調整勘定	△ 3,032,708	△ 2,930,862	△ 101,846
前年度繰越支払資金	5,176,691	5,358,491	△ 181,800
収入の部合計	13,059,688	12,814,961	244,727
支出の部			
人件費支出	3,266,981	3,081,280	185,701
教育研究費支出	1,751,295	1,688,116	63,179
管理経費支出	363,771	331,607	32,164
借入金等利息支出	167,253	183,892	△ 16,639
借入金等返済支出	369,410	383,040	△ 13,630
施設関係支出	350,000	351,380	△ 1,380
設備関係支出	546,752	581,684	△ 34,932
資産運用支出	1,319,939	1,627,230	△ 307,291
その他の支出	842,948	539,596	303,352
〔予備費〕	72,000	72,000	0
資金支出調整勘定	△ 11,908	△ 3,395	△ 8,513
次年度繰越支払資金	4,021,247	3,978,531	42,716
支出の部合計	13,059,688	12,814,961	244,727

（別表5）消費収支計算書の主要項目の分析表　単位：千円

主要項目の分析比率（%）			
項目	H13年度	H12年度	増減
補助金／帰属収入	9.03	8.58	0.45
人件費／帰属収入	39.08	37.71	1.37
教育研究経費／帰属収入	34.66	33.57	1.08
管理経費／帰属収入	4.56	4.04	0.52
借入金等利息／帰属収入	2.32	2.47	△ 0.14
人件費／学生納付金	45.19	45.83	△ 0.64

第16回 建築コンペ　ユニークな視点の作品、207点が応募

課題：まちなかに建つエコロジー住宅

全国の建築を学ぶ高校生を対象として、今年度も日本工業大学建築設計競技が実施された。今回は建築家の難波和彦氏（建築家・大阪市立大学教授）を審査員長に迎え、「まちなかに建つエコロジー住宅」を課題に開催された。入賞作品は以下のとおりである。

これらの作品は11月2日（土）～4日（月）の大学祭期間中、建築棟1階ホールにて展示されると共に、同4日（月）学友会館にて表彰式が行われる。

受賞の言葉

兵庫県立兵庫工業高等学校建築科　飴野　拓

飴野　拓

僕は、1年生のときに、この日本工業大学のコンペに出展しました。入選という結果をいただき、これから建築のことを学んでいこうという時でしたので、大きな自信となりました。これを機に、他のコンペにも挑戦してきました。そして3年生になった今、「もう1度日工大のコンペに出展してみよう。」と決意し、取り組みました。

今回は【まちなかに建つエコロジー住宅】という面白い反面、とても難しい課題でした。エコロジーと街中という、一見相反する設定のため、どう結びつけるか、コンセプトを決めるまでとても苦労しました。

3年生で入賞という結果をいただき、本当にうれしく思っています。これからも多くのことに挑戦し、建築をより深く勉強していきたいと思っています。

日本工業大学建築設計競技入選者

一　等　兵庫県立兵庫工業高等学校　飴野　拓
二　等　大阪市立工芸高等学校　福井　信昭
三　等　三重県立四日市工業高等学校　早川　義基

●審査員賞

山梨県立甲府工業高等学校　柏木　雄介
静岡県立静岡工業高等学校　滝波　祐揮
静岡県立修善寺工業高等学校　古川　博昭
三重県立伊勢工業高等学校　鎌谷　マイル

●佳　作

青森県立弘前工業高等学校　木村　裕和
群馬県立藤岡工業高等学校　木村　芳也
静岡県立静岡工業高等学校　青木　千沙
静岡県立修善寺工業高等学校　森　新之助
大阪市立工芸高等学校　黒木　文絵
高知県立宿毛工業高等学校　溝渕　健躬

●奨励賞

青森県立弘前工業高等学校　須藤　伸也
福島県立福島工業高等学校　澤口　建
群馬県立高崎工業高等学校　岩崎　美香
群馬県立藤岡工業高等学校　髙橋　里花
群馬県立藤岡工業高等学校　大谷　裕
神奈川県立神奈川工業高等学校　網代　孝生
静岡県立静岡工業高等学校　小林　哲也
静岡県立静岡工業高等学校　今村　友也
金沢市立工業高等学校　○橋場　勇一郎
大阪府立西野田工業高等学校　金森　幸男
大阪市立工芸高等学校　小早川　真広
兵庫県立龍野実業高等学校　小路　健太
大分県立日田林工高等学校　岸本　恭明
○河津　愛
諫山　紗己

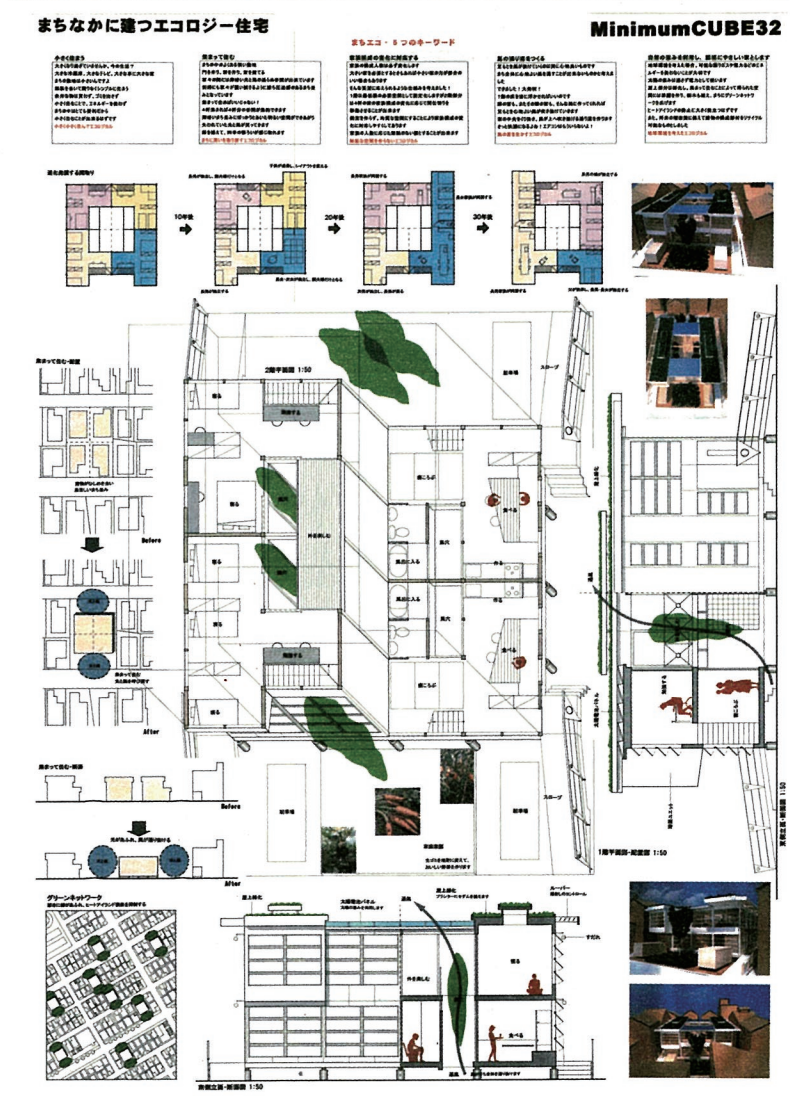
●奨励学校賞

青森県立青森工業高等学校
埼玉県立春日部工業高等学校
静岡県立静岡工業高等学校
大阪市立工芸高等学校

○印は共同作品の代表者です。

1等　飴野 拓君　受賞作品

MInimum CUBE32



講評

「エコロジカルとは何か」という問いは、今後、みなで答を探し出していくもの

「まちなかに建つエコロジー住宅」という課題は、数年前にテレビで放映された番組を見て思いついたものです。その番組は、若手の建築家3チームを指名し、東京郊外の住宅地にある具体的な敷地を与えて、予算3000万円で建てることのできる「エコロジカルな住宅」を設計するように依頼したコンペを、ドキュメンタリー・タッチで記録したものでした。その番組を見ていて面白かったのは、「エコロジカル」という概念について、3チームの若い建築家たちが考える内容がそれぞれ異なるだけでなく、審査委員の間にも大きな意見のくい違いがあったことです。一言でエコロジカルといっても、人によってさまざまなとらえ方があり、それによって住宅のデザインも大きく違ってきます。地球環境の問題に関連して、省エネルギー、リサイクル、炭酸ガス排出規制、廃棄物規制といった多くの問題が、現在、大きな注目を浴びていますが、住宅設計ひとつをとっても、何がエコロジカルであるかという問いに対して、じつにさまざまな回答があることは、僕にとっては意外な結果に思えました。そんなわけで、工業高校で建築を学ぶ学生を対象としたコンペの審査を依頼されたとき、直ちに思い浮かべたのは、同じテーマをもっと若い人たちはどう考えるだろうかという疑問でした。

飴野拓くんの1等案「Minimum CUBE32」のキーワードは、「小さく住むこと」です。つまり住まいをコンパクトにすることを通じて、生活の変化に対応し、空間を節約し、省エネルギーを実現し、集合化を実現するという総合的な提案なのです。エコロジカルという概念を空間のリサイクルとしてとらえる視点は、とても新鮮で現実性があると思います。何よりも都市への広がりを持った提案であることが魅力的です。住まいをコンパクトにすることで残った空間を緑化するという提案にも感心しました。

福井信昭くんの2等案「E・H・T Cycle」は大きなガラス箱の共有空間に個室の箱を取り付けたシンプルで軽快な住宅です。高校生とは思えないキレのいいデザインですが、それ以上に感心したのは、ガラス張の共有空間が巨大なダブルスキンに見えることです。機能的に有効であるかどうかは疑問が残りますが、ダブルスキンをここまで徹底すると、新しい建築の可能性が垣間見えるような気がします。

早川義基くんの3等案「Kameyama Living」は自分が生まれ育った「場所」への思いを建築化した詩的な作品です。どこがエコロジカルなのか疑問に思われるかも知れませんが、建築の長寿命化がエコロジカルな住宅の大きな条件であり、地域や家族に深く結びついた住宅こそが長く生き続けることを考えれば「精神のエコロジー」を感じさせる住宅もひとつの答えなのです。

「エコロジカルとは何か」という問いには、まだ明確な答えがありません。それは今後、みんなで考え、話し合うことによって答えを探し出していく問いなのです。そのような問いに対しては、これまでの知識や経験にとらわれない提案が必要です。高校生諸君の発想の中に、大学生や建築家以上に新鮮なアイデアが見られたのは、そのためだと思います。

難波　和彦（建築家）

（株）難波和彦・界工作舎代表取締役、大阪市立大学大学院工学系研究科都市系専攻教授を兼務。1947年大阪府生まれ。69年・東京大学工学部建築学科卒業、74年・同大学大学院博士課程修了。師・池辺陽氏の教えを継承・発展させた「箱の家」シリーズは日本の住宅デザインにおけるひとつのスタイルを確立したと言われる。著書多数。

第4回　日本工業大学ビジネス交流会

“「日工大発」の技術”をテーマに

大きな反響を呼び、盛況だった 第4回ビジネス交流会

産学リエゾンセンター長・教授　増田　伸爾

本学では9月27日（金）と28日（土）の2日間、第4回ビジネス交流会を開催した。今年のテーマは「日工大発」で、大学研究室や企業の開発した日工大ゆかりの技術・製品を集めて展示し、商談を促進すると同時に、本学学生諸君への教育の一環とすることが狙いである。

上：ソーラーカーの展示は学生の人気を集めた
左：体育館満杯に80のブースが展示され来場者は延約1,100人にのぼった

例年を上回る数と規模の多彩な展示

「日工大発」の技術とは、日工大研究室の開発した技術、日工大学生が独自で作りあげた技術、日工大卒業生が企業で開発に貢献した技術、産学共同で開発した技術等のことである。

このテーマのもとに企業に該当する技術の展示を要請したところ、大きな反響があり、自社で開発した大型機械や製品を実際に持ち込むところがほとんどで、中には、生産ラインの一部を展示する企業もあった。

一方大学の研究室も学生への教育目的ということもあり、例年を遙かに上回る数の研究室が参加した。

中でも目を引いたのは学生の展示だ。主催者の期待以上に優れた内容の展示があり、商品化に程近い内容や、すでに特許権を獲得しているものもあった。

会場の体育館満杯の80ブースには、55企業・団体、29研究室、学生8件、その他2件が展示された。

ハイテクシンポジウムも並行して開催

展示会に並行してハイテクシンポジウムが開催された。これは優れたハイテク技術や、事業化のための努力のプロセスの紹介で、次の4件が発表された。

1・炭素系高機能材料の新展開・本学先端技術センター竹内貞雄

2・マグネシウム加工技術への挑戦と課題・天馬マグテック（株）鈴木友夫

3・C／Cコンポジットを応用した摺動部品の事業化・（株）アクロス松野年宏

4・「視る」ことの事業化・（株）テクノ・テクノス山田吉郎

これらの発表は、先端材料技術、ものづくり技術、最先端検査技術についての解説的内容であり、これからの企業や大学における研究開発活動に大きな示唆を与えるものである。

求職活動や技術相談も

会場では、展示会の他に求人・求職活動や技術相談のためのブースや活動が行われた。これは、このビジネス交流会が学生や企業にとってのリクルート活動の一環と位置付けられるためで、多数の学生が企業の技術と同時に、就職情報を得るための絶好の機会と捉え、情報収集を行っていた。企業にとっても、学生への絶好のPRの機会であり、将来の重要なカスタマーを捉える機会でもあるからだ。

マイクロロボット学生大会

この他別会場では、第2回マイクロロボット学生大会が開催された。これは学生のものづくり技術の向上と関心を高めるための活動であり、3組織から約30人のプレイヤーが各自のマシンを持ち寄っての大会だ。

このように多彩な内容をもったビジネス交流会であったが、2日間で延べ約1100人の参加を得て閉会した。来年は更に盛会にするべく、企業の参加を求めると共に、教育上と求人・求職上の効果を更に高めるような工夫と努力を加えていきたいものと考えている。

●近隣企業見学会の日程とコース

No.	企業名	所在地	業種
Aコース　9月24日（火）：引率・機械工学科・小倉勝教授			
1	（株）サンフロロ	川口市東本郷	合成樹脂の切削加工，環境関連事業
2	エビスヤ工業（株）	岩槻市長宮	オフィス用家具の製造販売
3	協育歯車工業（株）	春日部市南栄町	規格歯車および関連機器の製造
Bコース　9月24日（火）：引率・機械工学科・兼子正生助教授			
4	（株）アクロス	蕨市錦町	炭素繊維，強化炭素複合材料の生産加工販売
5	都ローラー工業（株）	川口市弥平	印刷，工業用ゴムローラの製造販売
6	杉田電線（株）	岩槻市　浮谷	汎用電線（ビニル電線，通信ケーブル）の製造
Cコース　9月25日（水）：引率・機械工学科・小倉勝教授			
7	ウム・ヴェルト（株）	久喜市河原井町	廃棄物再生事業
8	日本ノッズル精機（株）	北葛飾郡鷲宮町	舶用ディーゼル機関用燃料噴射装置およびがスタービン燃料噴射用部品の製造
9	（株）サン精密化工研究所	久喜市所久喜	精密プラスチック機械部品の成形加工および販売、同金型の設計製造販売
Dコース　9月25日（水）：引率・機械工学科・玉木保教授			
10	（株）大和製作所	草加市旭町	歯車減速機，半導体製造装置などの設計、製作
11	（株）大同工業	越谷市蒲生	各種溶接加工全般，金属プレス加工，レーザ加工，プレス用金型設計製作，各種制御機器設計製作
12	（株）ヒガノ	草加市青柳	精密板金、機械加工製品，電気制御システムの開発販売

近隣企業12社を訪問

―機械学会とリエゾンセンター主催で―

日本機械学会関東支部と本学の産学リエゾンセンター主催による企業見学バスツアーが9月24日・25日の両日開催された。本学の近隣にある企業を4コースに分かれて12社を訪問する企画で、学生に企業に関する情報を提供することで、就職活動に役立ててほしいという主旨である。27日、28日に開催された「ビジネス交流会」とセットとなる企画である。

参加対象は、機械工学科とシステム工学科の3、4年生および大学院生。

見学会は、各日2コースずつ計4コースが設定され、朝9時半に本学を出発し、午後6時帰着。一日に3企業を訪問。全体で約60名の学生が参加した。

なお本企画の実行委員会のメンバーは次の通りである。委員長・玉木保氏（機械工学科教授）、委員・小倉勝氏（機械工学科教授、日本機械学会関東支部商議員）、伏見恒夫氏（機械工学科講師、日本機械学会関東支部学生会担当委員）、兼子正生氏（機械工学科助教授、機械工学科就職指導委員）、増田伸爾氏（本学産学リエゾンセンター長・教授）。

コース別の見学企業は、別表の通り。これらの企業は、いずれも本学の近くに本拠を構える地元企業である。社員数は15名から125名で、規模的には中小企業であるが、独自の技術を持つ「意欲的な企業」で、ほとんどの企業が本学卒業生を採用しており、ビジネス交流会にも出展している。

今回、企画室は2日目のCコースに同行取材した。

●埋め立てゼロを達成、廃棄物再生のウム・ヴェルト社

第一の訪問先ウム・ヴェルト（株）久喜リサイクルセンターでは、本学の卒業生・島村巧美さんが出迎えてくれた。島村さんは玉木ゼミの出身で卒業後5年たつ。当社は島村さんの入社当時は、小柳電気という電気屋さんであったが、4年前にこの分野に参入した。

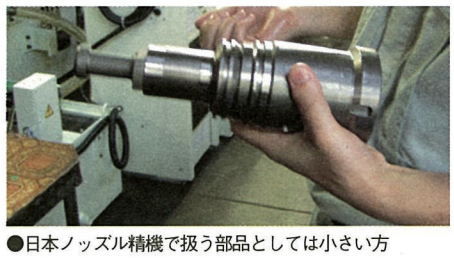
この会社は、プラスチック、金属、ガラス、陶磁器、木、紙に分別を徹底して行い、再資源化する。残りはゴミ発電を行うことで、埋め立てゼロを達成した。

拠点は久喜以外に、大宮に近い白岡工業団地内と、本社所在地である群馬県板倉町に各々リサイクルセンターを構えている。久喜リサイクルセンターでユニークな仕事は廃蛍光管リサイクルシステムである。世界初という低温加熱水銀回収機内を300℃に熱し、蛍光管の水銀を気化させ、取り除く。こうして無害化されたガラスは、ステンドグラスなどの材料に再生される。一方、回収された水銀は国内では処理できないため、米国で処理されるという。

●第一の訪問先はウム・ヴェルト（株）

●ミクロン単位の製造技術。船舶用ノズル製造の日本ノッズル精機

午後からは、日本ノッズル精機（株）を訪ねた。金子社長、山田総務部長による会社説明の後、本学の出身者である遠藤耕平さん、雫一美さん、秋葉大輔さんの3人が工場内を案内してくれた。ちなみにこの会社には、5名の卒業生が就職している。同社の筆頭株主は、50・7％の株を持つ日本郵船、次いで（株）商船三井が34・5％の株を保有している。主要取引先は三菱重工（株）が50％であり、経営は安定している。



●日本ノッズル精機で扱う部品としては小さい方

1940年の創業以来、ノズルの製造を核として技術を発展・蓄積させてきた。主力商品である大型船舶用燃料噴射ノズル、ガスタービン用ノズルは、自動車エンジンの燃料噴射ノズルとは比べ物にならない大きさで圧倒される。しかし、ノズルはエンジンの心臓部なので、ミクロン単位の精度が要求されるそうだ。

金子社長の考え方は、「学歴、国籍、年令、性別に関係なく、何ができるかが問題」だという。

●80％がソニー向け部品。プラスチック精密製品のサン精密化工研究所

●サン精密化工研究所を案内する渋谷取締役

同社は、1963年の創業。シチズン時計の歯車に始まったプラスチック精密部品づくりは、ソニーのウォークマンの部品を手がけたことで信頼を築き、今では取引の80％がソニーブランドの部品であるという。ソニーは、1部品に対して2社購買という方針だが、プラスチック精密部品に関しては、同社がずっと単独で受注しており、同社の技術水準の高さを察することができる。

製品化にあたっては、目的に応じた材料選択が求められ、さらに、コストとの兼合いも問題になる。最近では、プラスチックと金属、あるいは異なった種類のプラスチックを組み合わせるなど、複合材料化も進んでいる。こうした場合は、成形加工方法の開発も重要な課題となる。

当社には、本学から11人も就職している。電気電子工学科出身の今井浩次さんは、金型の仕事でNC加工の立ち上げ、ウォークマンの立ち上げに活躍し、現在は技術室開発事業課　統括課長を務めている。

玉木教授が大会長をつとめる

第29回臨床バイオメカニクス学会

本学機械工学科・玉木保教授は、9月27～29日、幕張メッセ国際会議場で開催された第29回日本臨床バイオメカニクス学会の大会長に選ばれ、無事重責を果たした。大会長は千葉大学大学院整形外科学・守屋秀繁教授と玉木教授の連名で、玉木教授は「私としては20年以上この分野の研究を続けており、大会長は大変名誉なことと思っております。また本学にとってもよいことだったと思います」と語っている。

なお同学会は、医学、生物学、工学、理学などの幅広い学際的研究組織であり、その研究領域は生体組織、今回は特にロボティック手術*や人工関節などを共通テーマに発表・講演が行なわれた。玉木教授は会長講演として「脊柱の形状および力学解析」の講演を行い、この分野の研究の歴史と今後の展望について解説した。

＊「ロボティック手術」とは、細かい場所の手術などを，手術器具と疾患部位を拡大してモニターで見ながらロボット（正式にはマニピュレータ）を遠隔操作して行なうもの。最近、急速に普及している。

就職戦線を勝ち抜くために

1年生から「キャリアガイダンス」を導入

学生部就職課

就職戦線は、例年にも増して厳しい状況にある。しかし、企業は「『やる気のある学生』なら、何人でも採用したい」とも言っている。就職戦線に勝ち抜く決め手は何か……。

学生の動きに大きな差

今年の就職戦線を振り返ってみると、先ず言えることは動きの良い学生とそうでない学生が極端であったことである。

3～4月頃に就職課に相談に来る学生と9～10月頃に来る学生で、相談内容に相当な違いを感じた。前者は就職活動に対して非常に前向きな相談が多いのに対し、後者は活動そのものが出来ていない者が多数を占めた。また、内定を得た後に最終決定をする時点で迷っている学生が多かったように思う。自分が目指した企業であるにもかかわらず「もっと他に自分に合った企業があるのではないか?」、または「本当にこの企業に決めてしまって良いのだろうか?」というように最後の『決め』がなかなか出来ないのである。

この背景には、〝近年の学生の意識の変化〟つまり自分がこれまで培ってきたことに対して自信が持てないこと、また〝家庭環境の変化〟により人や親に対して依頼心の強い学生が増えていることがあげられると思う。

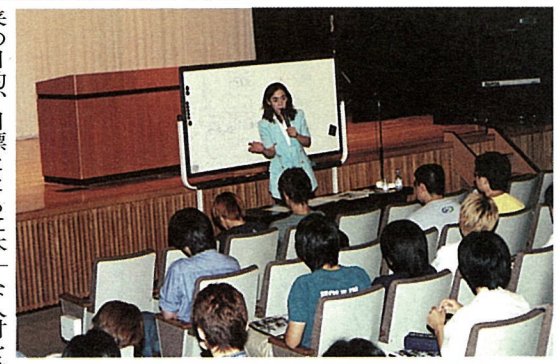
就職課員の指導を受ける学生

「キャリアガイダンス」の導入

就職課では、これらの状態からの意識改革をするために1～3年生を対象に「キャリアガイダンス」を開催した。

これは、早いうちから将来の目的、目標とともに本学に入学した理由を再認識させ、その後の学生生活の過ごし方を有意義なものにするためである。

このガイダンスを受講した学生のアンケートによると「自分に自信を持ちたい」「自らしたいことを探したい」「自分自身に責任を持ち見極めることが出来る人になりたい」「親に楽をさせたい」「自分の可能性を引き出したい」などの、回答が寄せられた。これらは1年生の答えの一部ではあるが、とても前向きであることに気づいた。



「キャリアガイダンス」は外部講師を招いて実施

また3年生のアンケートでは、「自分にも先があると少し希望が見えた」「社会がどのような人材を求めているのかが良くわかった」「就職に対して不安に思っていたが頑張ればできると思った」「気づいていなかったところを指摘された」というように〝就職〟を前提とした現実的な答えが出ている。

このようにアンケートの回答をみると、担当者として初の試みであった「キャリアガイダンス」の開催は、学生にとって就職への動機づけとして相当な意義があったと自負している。

就職課が学生に望むこと

今後もさらに内容を充実させ、本学の学生が実社会に出て行くにあたり、この「キャリアガイダンス」で学んだことを基に自らの人生を切り開いてくれることを望んでいる。

そして、就職活動という自分の人生を決める大事なことに対して、もっと危機感を持って挑んでほしい。

なぜならば、日本の産業界は、先行きの不透明感を払拭できないのが現状であるからだ。

この状況の中で企業の新卒者採用も、従来の採用形態とは違う多様な方法をとっており、ますますハードルを高くする傾向にある。

今年度、本学に求人をいただいた企業数は、昨年からすると製造業を中心に大幅に減少しており、本学の学生にとっては、由々しき問題である。

企業が望む人材

しかし、企業の人事担当者からは意外な答えも返ってきている。それは、「表立った採用活動はしていな↘

↙いが、良い学生の応募があったら随時受付けをいたします」というように企業にとって良い学生、つまりやる気のある学生は何人でもほしいということである。

このようにこれまでとは違った採用方法に対して学生の取るべき対策は、早い時期から自分の進路についてしっかりとした考えを持って学生生活を送ることであろう。そして、厳しい就職戦線を勝ち抜いてほしい。

特別奨学生制度について

この制度は、高等学校工業科の新卒者を対象とし、本学の学風の高揚と学術文化の発展を促すにふさわしい人物を採用するもので、毎年20名前後を採用の目安としている。採用された者は、特別奨学生として選考基準に基づき、入学金および学費の全額免除または学費の半額免除の特典が与えられる。また、4年間にわたって優秀な成績を修め、大学院への進学を希望する者には、大学院進学後もこの特典が継続される。

募集要項の出願資格は次のようにうたわれている。

①学業成績が特に優秀で、本学の教育方針を理解し、それに耐えられる向学心堅固な者。②学業成績が優秀で、特に優れた特長・特技を有し、本学においてその伸展が期待できる者。③学業成績が良好であり、かつ全国高等学校選手権大会等において入賞の経験を有し、本学においてその伸展が期待できる者。

キーワードは二つ。「文武両道」または「文文両道」に秀でていること。それに「リーダーシップ」である。

高校での学業成績が優れていることはもちろんのこと、それに加える何か、プラスアルファが必要となる。部活動における秀でた実績、資格取得、コンクール等での受賞歴、など。

さらに特別奨学生には「リーダーシップ」を特に期待している。入学後、周囲の学生によい刺激を与え、他学生の牽引力となるような資質が求められる。

審査方法は、第1次審査の「書類審査」および第2次審査の「面接」の2段階審査によって行なわれる。

面接は、学長以下、選考委員会のメンバーが行う。学長自ら面接に臨むことからも特別奨学生に寄せられている期待がいかに大きいものかがうかがわれる。

特別奨学生が得ている学費の全額あるいは半額免除という特典は在学期間中、保証されているものではない。特別奨学生の学業成績は毎年追跡調査をされ、一定の基準に達していない場合には資格の剥奪を含めた見直しが行なわれる。

努力の末に手にした名誉な、そして高価な資格を失うことのないように精進していただきたい。（入試室）

自己点検・評価進捗状況

現在、大学を取りまく厳しい環境の変化の中で、本学の教育研究活動の現状を把握し、その評価結果を踏まえ改善、向上を図るため、自己点検・評価プロジェクトを実施することとなった。評価に際しては、本学の掲げる理念・目的の実現、および大学改革の方向性などを配慮し、客観的で多面的な評価を行い、この結果については広く社会に公表していく予定である。

実施組織

点検・評価の実施組織として、自己点検運営委員会のもとに、基本事項検討委員会および自己点検実施委員会として10のワーキング・グループ（以下WG）を設置している。WGには主査1名、幹事1～2名、各学科および共通系から推薦された委員、事務局より推薦された委員および事務担当者を置いている。

点検評価項目

基本事項検討委員会、各WGの主要点検評価項目は左記のとおりである。

基本事項検討委員会　本学の理念・目的・教育目標

WG－1　教育研究組織／自己点検・評価システム

WG－2　教育研究内容・方法と条件整備／教育方法とその改善／国内外における教育研究交流

WG－3　学生の受け入れ

WG－4　教育研究のための人的体制

WG－5　施設・設備など

WG－6　図書館および図書館などの資料、学術情報

WG－7　学生生活への配慮／社会貢献

WG－8　管理運営

WG－9　財政

WG－10　事務組織

点検・評価の実施項目は、大学基準協会の示す項目の他、大学が独自に設定する項目である。

運営状況

5月9日に第1回自己点検運営委員会が開催され、5月14日の運営委員会にて学内に協力を要請。5月16日の教授会にて意思表明を行った。6月20日には第1回自己点検実施委員会連絡協議会が開催され、WGの点検調査が開始された。

現在は、自己点検実施委員会・連絡協議会にて進捗状況を確認、他のWGとの関連項目に対して情報の共有を考慮しながら、各WGが点検・評価を進めている状況である。点検項目が広範囲、あるいは専門的な分野に及ぶWGもあるため、委員を増員して対応している。

今後の進行

今後、12月25日に基本事項検討委員会および、WGが点検・評価結果報告を提出、自己点検運営委員会において編集が行われ、来春3月27日に「点検・評価報告書」が完成。4月2日に（財）大学基準協会に対し「点検・評価報告書」の他、「大学基礎データ」、その他の添付書類を提出し、相互評価を申請する予定である。

点検・評価を実施する際、現状を把握し、ご意見・ご要望を伺うため教職員および本学関係者に対して調査やアンケートなどを実施していきたいと考えている。衷心よりご協力をお願いする次第である。

本学が「日本留学試験」会場に決まる

来る11月17日（日）に（財）日本国際教育協会が行う「平成14年度日本留学試験」の埼玉会場に本学が選ばれた。この試験は、昨年までは「日本語能力試験1級」と「私費外国人留学生統一試験（理系）」に分かれていたのを統一したものである。

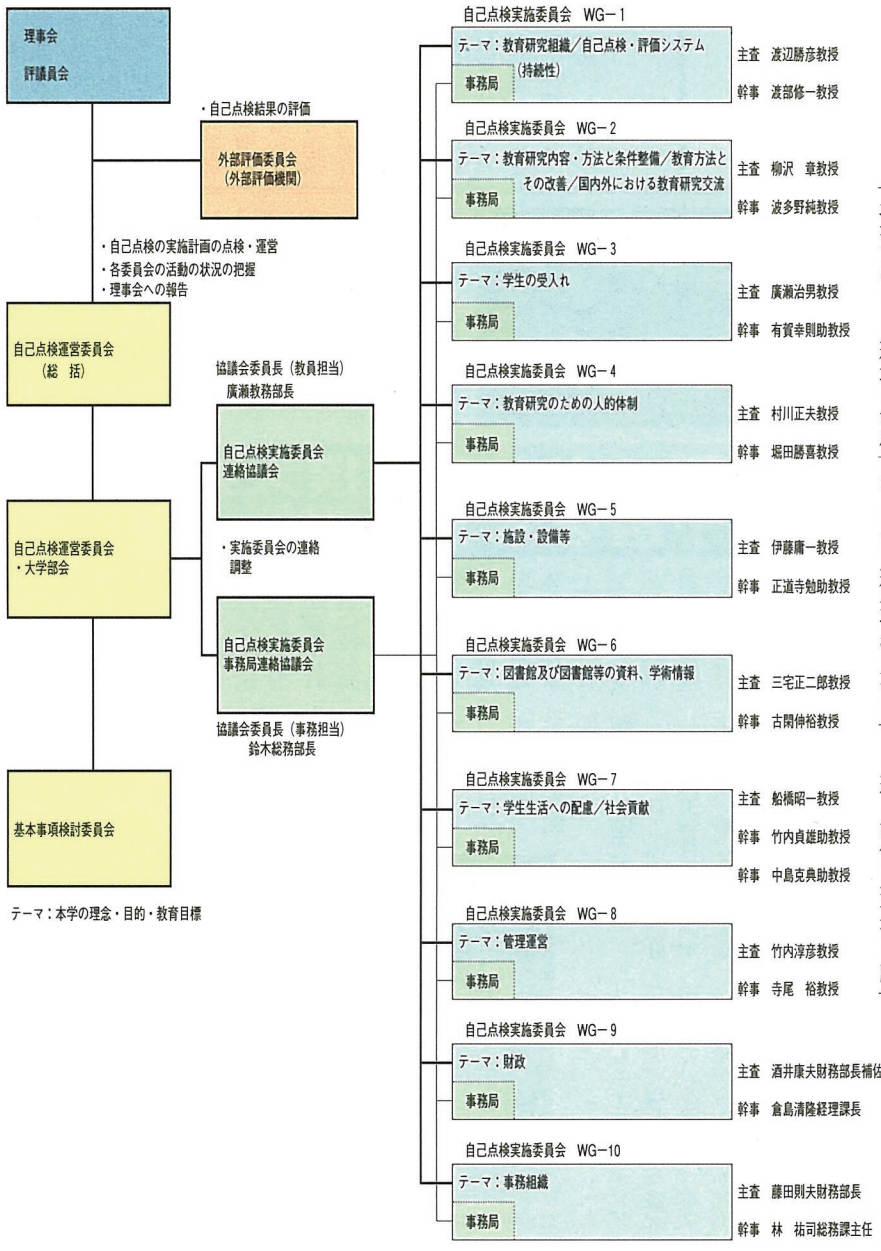
すでに6月に1回目が行われており、今回は第2回目として、803名の受験が予定されている。留学生にとってはこの試験を受けることによって、日本の大学への道が開ける重要な試験である。

日本工業大学においても「日本語」「理科（物理または化学）」「数学（コース2）」を受験すると、筆記試験が免除され、面接だけの試験になる。

本学が試験会場に選ばれたことは、外国人留学生に日本工業大学を知ってもらう絶好の機会である。本学のキャンパスで受験したことにより、日本工業大学の良さがわかり入学したいと希望する外国人留学生が1名でも多く増えることを期待している。

教職員および学生諸君にはご負担をおかけすると思うが、ご理解とご協力をお願いしたい。

●自己点検・評価の組織図



楽しく過ごそう若杉祭！！

Break mass conceptをテーマに

第34回　若杉祭　　11月2日（土）3日（日）4日（祝）開催

皆様のご参加を心からお待ちしています

大学祭実行委員会委員長　星　義一（会津工業高等学校出身）

今年も大学祭の季節が近づいて参りました。

今年で若杉祭も34回を数え、これもひとえに皆様方のご支援によるものと考えております。また、今までを凌ぐ大学祭にしようと日々準備に励んでいます。

今年は『Break mass concept』というテーマのもと準備を進めて参りました。このテーマは、〝既成概念を壊す〟という意味があります。学園祭という祭の場で、参加するみんな一人一人が持っている概念〝いつもの習慣やスタイル〟を壊し、今までに体験したことのない新しい事への挑戦・発見をする場所とし、参加者一人一人が自分の新しい一面を見つけ楽しんでほしい!!そして、大学生活において一番の思い出になるような、新しい若杉祭にしていこうという願いが込められています。さて、今年の若杉祭も様々な企画をご用意しています。是非とも皆さん参加してみて下さい。

1日目は『オープニングセレモニー&パレード』から始まり『走れメロス★』『Live2002』では歌手の下川みくに、バンドグループのTHE☆SCANTYをお呼びしています。その後『初夜祭』の順で行われます。

2日目は『吹奏楽団コンサート』『若杉祭発電所』『演武会』そして『秋のからっ風こんさぁと』ではスカバンドのDOMINO88を迎えLiveを行います。

3日目は『Threeople～トリオこそすべて～』『喰らえ!ライダーショウ』『ダンスバトルグランプリ'02』『美男子コンテスト』『ちょっとだけよ～♪』『後夜祭』で幕を閉じます。

今年は参加団体も増え各クラブ、サークル、研究室ともたくさんの出し物を用意しています。どうぞご期待ください。

今回の大学祭では大学祭実行委員会の人数も増え、より盛大なものを目指し委員会一同、力を合わせ頑張ってきました。大学関係者、地域住民の皆様のご協力に感謝いたします。

また、お友達をお誘いのうえ、一度足をお運びください。皆様がお越しくださるのを大学祭実行委員会一同、心よりお待ちしております。

今年の若杉祭もさまざまなイベントが開催される

昨年の若杉祭では「美男子コンテスト」が話題を呼んだ

第3回ホームカミングデーへのお誘い

第3回ホームカミングデーが、若杉祭初日の11月2日に開催される

ホームカミングデー実行委員会

第3回ホームカミングデーが、若杉祭初日の11月2日に、日本工業大学と工友会の共催により開催される。平成12年の第1回は、1期・10期・20期のみなさんにお集まりいただいた。今年は第3回にあたり、過去2回と同様に、卒業後30年・20年・10年のみなさんにお集まりいただこうと企画した。

企画に従い、卒業期9期・13期・23期の工友会会員のみなさん宛に、「ホームカミングデーご案内」1884通をお送りし、参加していただけるよう呼びかけた。なお、システム工学科は5期・15期のみなさんが対象となっている。

工友会では、ホームカミングデーのこの機会を利用して、卒業後は次第に疎遠となる大学時代の友人たちとの交流や、恩師である教員との再会の場としてほしいと考えている。

ところで、大学時代とは、勉強はひとまず置けば、概してサークルの先輩・後輩、また卒研の仲間たちとの議論や共同作業に没頭した青年前期の4年間を指しているだろう。学生時代に考えたことや議論は、その当時思っていたほど重要なことではなく、また深く考えて訳ではないことは後から分かるのだが、本当に大事なことはこの4年間の学生生活の中での、良くも悪くも友人や教員たちとの「出会い」であり、実は「自分との出会い」でもあると考えられる。

学生時代を厭うのも懐かしむのも、「出会い」に失敗したか成功したかにかかってはいまいか。大学も工友会もホームカミングデーを、自らの学生時代のそうした「出会いの検証」に利用してほしいと思っている。

また、このホームカミングデーを、現在の職場で抱える疑問点の解明や本学教員による技術指導、しいては産学交流のきっかけとして活用していただければ幸いである。

ホームカミングデー当日は、本館1階ロビーにて受付、11時から12時30分の間に教職員の案内による各センター・博物館を中心とした学内見学ツアー。15時から17時の間にパーティーを開催し記念品を用意、パーティーの時間内に抽選会も予定している。是非ともご参加を。

芋煮会便り

後援会蔵王支部から山形芋煮と宮城の秋刀魚の塩焼きコーナー

後援会蔵王支部　支部長　滝口和喜

蔵王連峰を挟んで山形、宮城両県の会員で活動している当支部は、支部創立20周年記念事業の一環として、後援会の学園祭への初参加を決意し、ご来場の皆様への期待に添えるべく準備を進めて参りました。

そして山形の芋煮と宮城沖の秋刀魚の塩焼きなどを次の通り提供出店致します。

日時・平成14年11月3日（日）午前11時～午後1時30分まで

但し、売り切れ御免！

場所・図書館前「後援会蔵王支部」

料金・200円（芋煮1杯・秋刀魚1尾込）

＊希望者に山形地酒コップ1杯サービス！

さて、芋煮会をご存知ですか？　秋になると家族・職場・友人グループなどが集い、秋の行事として市の中心部を流れる馬見ヶ崎川原で石を積んで竈を作り薪を焚き、鉄鍋で里芋・牛肉・蒟蒻・葱・キノコなどを入れて醤油・酒・砂糖で味付けした野趣あふれた鍋料理を作ります。特にやり方の決まりはなく美味しければそれでいい…要は皆でワイワイ集まって川原で芋煮と旬の秋刀魚の塩焼き等で酒を酌み交わす山形の秋の風物詩です。毎年9月の第1日曜日には、直径6mの大鍋に3万食の芋煮を振る舞う「日本一の芋煮会フェスティバル」も開催しています。「今年芋煮会何回やったは?」が秋の山形の挨拶なのです。

3年前の地域別教育懇談会にご出席の神馬学長先生並びに佐藤後援会会長のご要望に応える事が出来ましたことは、皆様方のご理解、ご協力の賜と深く感謝致します。これが後援会参加の礎になればと考えております。多くの方々のご来店を支部一同心よりお待ちしています。「みんな早ぐ来てけらっしゃいす！」

今年で第14回を迎える全国ロボット相撲大会が開催中である。9月1日の北海道会場を皮切りに全国9地区10会場で地区予選が行われ、10月13日の関東大会では、本学も会場になった。関東地区は参加者が多いため2会場で同時開催されたもの。本学には、ロボット640台、1300余人が参加し、技を競った。

全国ロボット相撲大会予選を本学で開催

当日は、高校生の部240台、全日本の部400台が参加。開会式では、本学の大川陽康理事長が祝辞を述べた。会場となった体育館には6つの土俵が設けられ互いに技を競ったが、当日の優勝は、高校生の部・石原純君（群馬県立新田暁高等学校）。日本工業大学付属工業高等学校からも11台が参加し、健闘した。会場では父親がロボット相撲に挑み、子供を背負った母親が応援する微笑ましい光景も見られた。最後に工業教育研究所所長・木村寛治教授が「競技の結果だけにとらわれず、ロボットの楽しさ面白さを、地域に戻って小学校、中学校にも広めてほしい」と講評した。

11月2日には岩手県で高校生全国大会が行われ、12月23日には、両国国技館で全国大会が開催される。

岡本君は全国大会へ出場

前号の日工大通信で紹介した機械工学科4年の岡本宇大君は、既に北海道大会で優勝し、全国大会への進出を決めているという。

全国大会の上位入賞者は、この後、アメリカに遠征し世界の土俵で戦うことになる。日本の国技である相撲をロボットという新しい素材で実現する「ロボット相撲」は、日本発のグローバルスタンダードとしてアメリカでもエキサイティングな大会を実現し、年々盛況になっているそうだ。本学から何組が全国大会へ進出し、そのうち何人がアメリカへ遠征するか、期待をこめて応援したい。

ロボット相撲大会のポスター

スターリングテクノラリー開催

11月16日・本学で

第6回スターリングテクノラリーが本学を会場に11月16日（土）開催される。スターリングテクノラリーは、自作のスターリングエンジンカーのコンテストであり、120～130人の参加が予想されている。

同ラリーはスターリングテクノラリー技術会、全国工業高等学校長協会、日本工学教育協会の主催で、関東甲信越地区機械工業教育研究会、東京都機械工業教育研究会が共催、文部科学省、経済産業省、日本工業新聞社、全日本中学校技術家庭科研究会、（株）誠文堂新光社が後援する。また（財）日本自動車教育振興財団、（社）日本機械学会、（社）精密工学会、（社）日本設計工学会、（社）日本太陽エネルギー学会、省エネルギー研究会が協賛する。

スターリングエンジンは、1816年ロバート・スターリングによって発明されて以来多くの研究がなされ、その特徴は外熱機関であるため熱源・燃料を選ばず、誰もが簡単に作れ、熱が仕事をすることが理解されるため、創造性と感性の養成のための教材として優れている。また、このエンジンは理論的には温度差さえあれば高効率・多種熱源に対応し、静粛という優れた特徴があるため、地球環境の温暖化防止に対応できる21世紀の夢のエンジンとしてその可能性が期待されている。

本学吹奏楽団指揮者・山崎氏を読売が紹介

来る11月24日（日）14時から日本工業大学吹奏楽団の第19回定期演奏会が春日部市民文化会館大ホールで開催される（入場無料）。「世界」をテーマに、山崎茂氏（53）がタクトをふるう。この山崎氏が、9月30日付読売新聞埼玉版「この人と」の欄に大きく紹介された。

同氏は越谷生まれの越谷育ちで春日部高校から東京芸大器楽科に進み、大学院修了後、新星日本交響楽団（現東京フィルハーモニー）で活躍、その後指揮者としてオーストリア、イタリアなど世界各地で修業、91年夏にはチェコで開催の国際指揮者ワークショップに参加した。帰国後県内在住のプロ演奏家ら16人で埼玉室内オーケストラを組織、10月19日に母校の春日部高校で同オーケストラの創立10周年コンサートを開く。

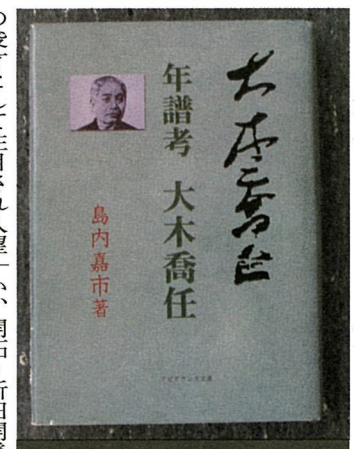
本学設立のルーツがわかる「大木喬任伝」発刊される

共通系教授　竹内淳彦

年譜考「大木喬任」がこのたび発刊された。大木喬任（たかとう）は西郷隆盛、大久保利通、伊藤博文、大隈重信、山県有朋、木戸孝允などと並ぶ明治維新の元勲でありながらこれまでその伝記が出版されることがなく、明治史の空白部分をなしていた。この伝記は、著者の島内嘉市が西日本新聞社に勤める傍ら永年心血を注いで散逸した貴重な資料を集め、年譜の形でアピアランス工房から出版されたものである。574ページにおよぶ大著は今後の諸分野の研究に大きく貢献するものと期待され注目を集めている。大木喬任は、佐賀鍋島藩士の家に生まれ、少年時代から藩校「弘道館」の俊才として注目され人望篤かった。世は幕末であり、大木は大隈重信、江藤新平、副島種臣などとともに尊王討幕運動に参画、新政府樹立に際しては、岩倉具視、木戸孝允らにその能力と人格を認められ中心勢力として活躍する。大木の最初の大事業は東京遷都の推進であり、遷都と共に大木は東京府知事として辣腕を振るい、開拓・新田開発や山手の緑化などを進める。その後、参議、初代文部卿（大臣）、初代法務卿、民部卿、文部大臣、元老院議長、それに枢密院議長などを歴任、明治32年68歳で逝去するまで常に政治の第一線で活躍を続けた。大木が精力を注いだのはボアソナードと交流を持ちながら実現した民法の編纂と学制の発布であり、いずれも、近代国家日本の根幹を成す大事業でありその課程がエピソードを交えて詳細に記述されている。なかでも、2度にわたって文部大臣を務めたことからわかるように教育制度の充実にはもっとも心血を注いでいる。もし、大木が薩長の出身であったなら総理としてさらに大きな業績をなしたであろうといわれている。

大木喬任の教育への情熱は、同じく佐賀出身で大木の薫陶を受けた古賀廉造が同志ともに設立した本学園に引き継がれた。さらにその意を受けて校主となった2代目の大木遠吉、3代目の大木喜福初代理事長、さらに、4代目に当たる大木吉甫理事、大木知紀評議員へと継承されている。本学園のルーツを知る上でも本書の出版は大きな意義を持つものである。

●「年譜考　大木喬任」島内嘉市著　発行所・アピアランス工房　定価3990円（税込）



大木喬任は教育制度の充実にもっとも心血を注いだ

石川県から徹夜でかけつけてくれた手塚さん所有の日本最大級のC62

5インチゲージ

ミニトレイン・フェスティバル開催

9月14日、15日の両日、本学キャンパス内で、5インチゲージ・トレイン・フェスティバルが開催された。

これは5年後に迫った本学園創立100周年に向け、運転会復活を目指して開催されたもの。全国から自慢のミニSL持参の出場者が集い、出場機関車36台、運転者・観客含め延べ300人が参加、大きな成果が得られた。

（写真および情報提供は、日本工業大学付属東京工業高等学校）

シンガポールの環境省副大臣、太陽光発電システムを見学

去る10月23日（水）、シンガポール共和国より同共和国環境省副大臣バラジ・サダシヴァン博士以下9名が太陽光発電システムを見学するために本学を訪れた。

現在シンガポール政府では、20kW＋200kWの太陽光発電システムを計画中であり、今回の訪問はその設置事例としての実地見学と併せて本学の環境問題取組状況、太陽光発電システム運転状況の研究等が目的であった。

一行は15時30分に到着、学長室で大学側から本学の太陽光発電システムの概要説明を受けた後、実際の太陽光発電システムを見学した。その後、工業技術博物館、UHVを見学し、30分以上にわたる熱心なディスカッションを終え本学を後にした。

屋上の太陽光発電システムのキャットウォーク上にて

「日経インターネットアワード2002」で宮代町が「地域活性化センター賞」を受賞

日本経済新聞社が主催した「日経インターネットアワード2002」の自治体部門で、本学の所在地である宮代町が、「地域活性化センター賞」を受賞し、9月26日付の日経新聞、日経産業新聞に写真入りで紹介された。

この「アワード2002」はビジネス部門、自治体・教育・NPO（非営利組織）部門で、業務の活性化、効率化にインターネットの特性を活かしている事例に与えられるもの。各部門でそれぞれ5件を選定するが、地域活性化センター賞は宮代町のみに与えられた。

まちの話題を動画で配信

同紙は宮代町について、次のように紹介している。

「町民サイドの視点を大事にした情報やサービスを豊富に掲載している。町のその時々の話題を動画で配信したり、カレンダーでリアルタイムに行事を知らせるなど町全体の動きが町民によくわかるようにつくられている。入札情報の公開や町長への手紙など町政の透明化に取り組んでいる姿勢に好感がもてる。ほぼ半日に1回、新しい情報を更新し「まちづくり出前講座」「まちづくり人材登録やりたいゾウ」などユニークな施策も実践している」

（特長は、日経産業新聞の紹介記事よりまとめた。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

学友会館で古楽器のコンサート開催

生涯学習センターの主催で、9月7日、本学学友会館でバロック・アンサンブルによるコンサートが開催された。演奏は、オランダでの演奏活動を経て帰国したルストフォッファースというグループ。リコーダー、チェンバロ、ミュゼット、リュート、テオルボ、バロックヴァイオリンといった古楽器を扱い、作曲された当時の音と雰囲気を再現する演奏が特徴だ。

いわゆるクラシック音楽は約200年前のものだが、彼らが演奏する音楽は約400年前のものだという。

当日は、「楽園の響き」をテーマに、古楽器に対するルストフォッファースのメンバー（上）と演奏風景（下）

説明も交えながら、ゆったりした演奏で聴衆を楽しませてくれた。演奏後、各メンバーは自らの楽器について、来場者の質問にこたえてくれたので、ほとんどの聴衆が舞台上に参集するという珍しい光景が繰り広げられた。

STUDENT FACE☆かお '02

阿部　義樹くん

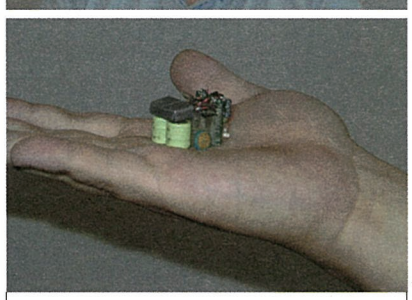
（機械工学科4年）

■マイクロロボットの相撲大会で優勝

2002年3月30日、ロボットコンテスト発祥の地である東京工業大学で、20㎜四方以下の小さなサイズのロボコン（ロボット相撲）が行われた。今大会から新設された、無線式の相撲ロボットによる「無線の部」で、見事、本学機械工学科4年、阿部義樹君が優勝に輝いた。

ロボット相撲としては、毎年国技館で行われる「全日本ロボット相撲大会」があまりにも有名だが、小さなロボット同士による「相撲マイクロメカニズム部門」も負けてはいない。手のひらにすっぽりと収まるくらい小さなロボット同士の競技であるが、大会会場は見ている者を大きくわかせる白熱するものとなった。

今回の小さなロボット相撲の土俵は全日本ロボット相撲大会で使われる土俵の約10分の1（直径20㎝×厚さ1㎝）の大きさである。その小さな土俵で繰り広げられる小さなロボット相撲の決まり手は多種多様で、バリエーションに富んでいる。小さなロボット同士が全力で押し合った力勝負の末の〝押し出し〟もあれば、豪快に相手をひっくり返す投げ技も見られるらしい。そして、小さなロボットならではの勢い余っての〝勇み足〟も会場をリラックスさせる。そんな数々の名勝負を見られるのが、「相撲マイクロメカニズム部門」のおもしろさだ。


阿部君の作製した優勝ロボット「プレアデス2」

阿部君の作製した優勝ロボット「プレアデス2」も〝押し出し〟を得意としている。タカラの新型チョロQを改造して、パワーのあるマイクロロボットに仕上げた。どれくらいハイパワーなのかというと、市販の単三乾電池4個パックを押せてしまうくらいだ。20㎜四方のロボットにここまでのパワーを内蔵させるのは至難の業だ。

阿部君に話をきいてみたところ、4年生で卒業研究に着手するまでは、マイクロロボットとは、無縁だった。そもそも研究室を選んだ理由も卒業テーマではなく、中里裕一先生の人柄に惹かれ決めた部分が大きいという。その中里研究室で出会ったのがマイクロロボットである。小さなロボットなだけに、作るのはさぞかし大変なことだろうと質問してみたが、手先の器用な阿部君にとってははさほど抵抗もなく取り組めたそうだ。昔から細かい作業は得意だったらしく、今大会に出場させた「プレアデス2」も製作期間は3日間（1日平均8時間）だそうだ。短期間でこれだけのロボットを作り上げる発想と開発技術には本当に驚かされる。

しかし、安部君に言わせると「プレアデス2」も試作段階でまだまだ改良の余地があるとの事。何しろ全て手作りのために、一つの穴を開けるにも0.1㎜のズレでロボットの動きが違ってくるし、重りの配置も今後の課題だと語ってくれた。

小さなロボットに託された夢と期待は果てしなく大きい。さらに大きく羽ばたいてほしい。（E）

「歴史的価値のある工作機械の顕彰」厳正な審査はじまる

「歴史的価値のある工作機械を顕彰する会」（会長・大和田国男氏・本学工業技術博物館後援会長、事務局・同博物館内）は、第5回目の募集を終え、約70機種について、厳正な審査を始めている。

工作機械は、マザーマシンと呼ばれ各種の機械製品を生み出す設備機械である。第2次世界大戦前は、ほとんどが外国機械のコピーであったが、日本独自の「名機」を生み出し、今日では世界のトップ水準にまで成長した。しかし「名機」も時代の流れと共に忘れられようとしている。これらの中から、一時代を画したエポックメーキングなものとベストセラーを継続したものなどを顕彰することにより、先人の労苦に報いるとともに、今後のさらなる発展に寄与することがこの事業の意図である。

推薦委員会（委員長・吉田嘉太郎・千葉大学名誉教授）では、慎重に調査検討を進めており、最終結果は4月初旬に発表される。

9月9日・記者発表する吉田嘉太郎推薦委員会長

人事異動

【任用】（10月1日付）
◆武田光史教授（建築学科）
昭和二十五年四月十七日生まれ。昭和四十八年三月、東京工業大学工学部卒業

【任命】（10月1日付）
◆機械工学科主任　梅崎栄作教授（新任）
◆システム工学科主任　原利次教授（新任）
◆情報工学科主任　樺澤康夫教授（再任）
◆電気工学専攻幹事　堀田勝喜教授（再任）
◆建築学専攻幹事　白石一郎教授（新任）
◆システム工学専攻幹事　渡部修一教授（新任）
◆産学リエゾンセンター長　増田伸爾教授（再任）

【解任】（9月30日付）
◆システム工学専攻幹事　鈴木清教授

【退職】（9月6日付）
◆秋山金生実験講師（先端材料技術研究センター）

国外出張（5月～8月）

◆田中隆治助教授（工業教育研究所）／出張先＝カナダ（5／1～5／11）／目的＝日加中学校国際交流プログラムの現地指導、遠隔教育の実態調査
◆古閑伸裕教授（機械工学科）／出張先＝台湾（5／10～5／13）／目的＝台湾における学生募集のための説明会
◆大場廣子教授（教務部入試室）／出張先＝台湾（5／10～5／13）／目的＝台湾における学生募集のための説明会
◆伊藤庸一教授（建築学科）／出張先＝韓国（5／10～5／13）／目的＝韓国農村建築学会における講演
◆大野修一助教授（共通系）／出張先＝米国（5／13～5／24）／目的＝研究集会「The Fourth Conference on Function Spaces」に参加、研究発表を行い、Cincinati大学において招待講演
◆辻村泰弘助教授（情報工学科）／出張先＝米国（5／14～5／19）／目的＝WCCI2002／CEC2002国際会議にて研究発表
◆市橋重勝教授（建築学科）／出張先＝中国（5／18～5／23）／目的＝fib国際会議（Construction Components Technology Standard Committee）に出席、日本案発表、議論
◆成田健一教授（建築学科）／出張先＝米国（5／18～5／26）／目的＝第4回都市環境に関するシンポジウム参加
◆大木幹夫助教授（情報工学科）／出張先＝米国（5／18～5／25）／目的＝ISCE（International Conference of Software Engineering）2002の参加と併設ワークショップ（IWPSE2002）での論文発表
◆神林靖講師（情報工学科）／出張先＝米国（5／18～5／25）／目的＝ICSE（International Conference of Software Engineering）2002の参加と併設ワークショップ（IWPSE2002）での論文発表
◆神雅彦講師（機械工学科）／出張先＝米国（5／19～5／26）／目的＝30th North American Manufacturing Research Conference（NAMRC30）にて研究発表
◆森真作教授（電気電子工学科）／出張先＝米国（5／26～5／31）／目的＝International Symposium on Circuits and Systems（回路とシステムに関する国際会議）にて座長2件、論文発表2件
◆神野健哉助教授（電気電子工学科）／出張先＝米国（5／26～5／31）／目的＝ISCAS2002に参加、研究発表
◆小倉勝教授（機械工学科）／出張先＝フィンランド（6／1～6／9）／目的＝FISITAにて研究発表
◆佐々木哲夫教授（機械工学科）／出張先＝タイ（6／2～6／8）／目的＝JICAからの依頼による「タイ金型技術向上事業」中間評価
◆村口昌之教授（建築学科）／出張先＝ドイツ（6／4～6／7）／目的＝ISO17025校正機関視察（PTB）
◆脇本隆之講師（超高圧放電研究センター）／出張先＝ドイツ（6／4～6／14）／目的＝UHV標準機器の校正試験立会い及びISO17025校正機関視察・設備視察
◆清水博幸助手（超高圧放電研究センター）／出張先＝ドイツ（6／4～6／14）／目的＝UHV標準機器の校正試験立会い及びISO17025校正機関視察・設備視察
◆村口昌之教授（建築学科）／出張先＝ポルトガル（6／8～6／17）／目的＝Sustainable Energy Technology（SET2002）出席・講演、視察
◆原利次教授（システム工学科）／出張先＝ポルトガル（6／10～6／17）／目的＝第1回永続的エネルギー利用に関する国際会議にて研究発表
◆梅崎栄作教授（機械工学科）／出張先＝ドイツ（6／24～6／29）／目的＝11th International Symposium on Nondestructive Characterization of Materials（第11回非破壊的材料特性評価に関する国際会議）での論文発表
◆波多野純教授（建築学科）／出張先＝ノルウェー（6／25～7／4）／目的＝ノルウェー工科大学に於ける「歴史的資産を生かした町の再生―出島を中心に」の講演と打合せ
◆伊原征治郎教授（システム工学科）／出張先＝ドイツ（6／30～7／6）／目的＝World Renewable Energy Congressで研究発表
◆森宮脩教授（電気電子工学科）／出張先＝フランス（6／30～7／7）／目的＝20th International Symposium on Dischanges and Electrical Insulation in vacuumにて研究発表
◆丹澤祥晃講師（機械工学科）／出張先＝ドイツ（6／30～7／10）／目的＝The World wind Energy Conferenceにおける論文発表
◆森田登教授（電気電子工学科）／出張先＝韓国（7／10～7／12）／目的＝日韓、電気学会共催産業応用フォーラム「道流機の整流と保守技術」の開催（座長、講演）
◆塚林功助教授（共通系）／出張先＝フランス（7／13～7／22）／目的＝16th Escamping and 5Th ICPRにての論文発表、及び、科学博物館でのデモ実験機材開発の資料収集
◆佐藤杉弥講師（共通系）出張先＝豪州（7／14～7／20）／目的＝国際会議（11th International Congress on Plasuma Physics）への出席と研究発表
◆堀田勝喜教授（電気電子工学科）／出張先＝イタリア（7／14～7／21）／目的＝CIMETEC2002にて研究発表
◆宮沢肇助教授（機械工学科）／出張先＝イタリア（7／14～7／21）／目的＝CIMETEC2002にて研究発表
◆竹内貞雄助教授（先端材料技術研究センター）／出張先＝イタリア（7／14～7／21）／目的＝CIMETEC2002にて研究発表
◆森真作教授（電気電子工学科）／出張先＝タイ（7／16～7／20）／目的＝The International Technical Conference on Circuits Systems, Computers and Communicationsで座長及び論文発表
◆神野健哉助教授（電気電子工学科）／出張先＝タイ（7／16～7／20）／目的＝The International Technical Conference on Circuits Systems, Computers and Communicationsで座長及び論文発表
◆木許雅則助手（電気電子工学科）／出張先＝タイ（7／16～7／20）／目的＝The International Technical Conference on Circuits Systems, Computers and Communicationsで座長及び論文発表
◆鈴木敏正教授（システム工学科）／出張先＝ドイツ、フランス（7／19～8／2）／目的＝Int'l Workshop On Nitride Semiconductors（IWN2002）における研究発表及び関連企業訪問
◆竹内淳彦教授（共通系）／出張先＝南アフリカ（7／27～8／7）／目的＝国際地理学会（IGU）に於ける発表及び常任委員会参加等
◆小林哲二教授（情報工学科）／出張先＝米国（8／11～8／16）／目的＝SIP2002及びIMSA2002国際会議くの論文発表
◆石崎克也助教授（共通系）／出張先＝中国（8／13～8／18）／目的＝Shanghai Jiao・Tong 大学主催による研究集会icm2002 Satellite Conference "Complex Analysis"において講演、及び函数論関係の研究打合せ
◆渡辺康夫教授（電気電子工学科）／出張先＝オランダ（8／16～8／29）／目的＝第27回国際電波科学連合（URSI）総会に於ける招待論文発表並びに技術資料の収集
◆原利次教授（システム工学科）／出張先＝フランス、ドイツ（8／16～8／30）／目的＝第12回国際伝道熱会議にて研究発表及び日独多相流会議出席
◆鈴木康之助教授（共通系）／出張先＝モンゴル（8／17～8／31）／目的＝Darhadyn湿地の環境調査
◆市川泰弘助教授（共通系）／出張先＝米国、カナダ（8／17～9／11）／目的＝平成14年度英会話カナダ特別セミナー引率
◆荒井美千代職員（教務部入試室）／出張先＝カナダ（8／17～9／11）／目的＝平成14年度英会話カナダ特別セミナー引率
◆衛藤和文助教授（共通系）／出張先＝中国（8／19～8／29）／目的＝International Congress of Mathematicians Beijing Chinaにおいて研究発表
◆森田登教授（電気電子工学科）／出張先＝豪州（8／26～9／3）／目的＝（豪）BHP製鉄（株）Hot Strip Mill 4500KW モーター実効出力UPの調査研究
◆神力正宣教授（情報工学科）／出張先＝チェコ（8／27～9／7）／目的＝IEEE International Symposium on Spread Spectrum Techniques and applications 2002にて論文発表
◆高瀬浩史助手（情報工学科）／出張先＝チェコ（8／27～9／7）／目的＝IEEE International Symposium on Spread Spectrum Techniques and applications 2002にて論文発表

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

近事片々

先輩だより

高校時代の夢を実現

西村智道
（五所川原工業高等学校出身）
電気電子工学科 第27期生
青森県立五所川原工業高等学校
電子機械科教諭

あれは高校3年の夏だった。野球部が甲子園予選青森県大会の決勝戦へ進出した。当時生徒会長だった私は「優勝したら何て挨拶しよう…」などとつまらないことを考えながらトランペットを片手に応援スタンドにいた。両者互いに応援スタンドはほぼ満席であるがこちらはトランペット3本。相手チームの吹奏楽部員は30名を超えていた。鳴り物の差は歴然としていた。

私は小学5年生から中学3年生まで吹奏楽部に所属しトランペットを吹いていた。家業が電気工事店だったこともあり五所川原工業高校電気科に入学。吹奏楽団もあったのだが団員数はほぼゼロの活動低迷状態。ちょうどアマチュア無線に凝っていたこともあり吹奏楽から離れて電子部に入部した。しかしこのような一大事？とあっては黙っていられず助っ人として埃のかぶっていたマイトランペットを引っぱり出して応援することとなった。試合は序盤本校がリードしていたものの8回に逆転され結局準優勝で熱い夏は終わった。私は試合に負けた悔しさ以上に応援で負けたという悔しさの方が強かった。活動低迷状態の吹奏楽団をなぜ自分の手で活気あるものにしようとしなかったのか、という後悔が残った。私はその時、絶対に教師になって青森へ帰り、いずれ母校に赴任したときには吹奏楽団を復活させようと心に誓い日本工業大学電気電子工学科に進んだ。

ここまで書けばたぶん読者の方々は「大学時代は吹奏楽団に所属したんだろう」と思われるかもしれないが、実は親の強い反対があり無線部に所属することとなった。たぶん私が吹奏楽に携われば部活ばかりに勤しみ勉学が疎かになるだろうという危機感があったに違いない。おかげで無線部への入部が私にとって大きな転機を迎えた。そこで知り合ったたくさんの先生方、先輩、同輩そして後輩達との出会いによって大学生活がより充実したものとなった。特に学内の青森県人会を立ち上げ、そして軌道に乗せる際の原動力にもなった。また石田・高橋（明）研究室でも良き先輩、良き友人と最高の環境下で過ごすことができた。私自身どちらかといえば青森県教員採用試験に関する研究の方に力を注いでいたかもしれないがこれも良きパートナーに恵まれたおかげである。

そして平成10年4月、教諭に正式採用され初任地が母校となった。これも和田先生、関口先生、堀内先生そして木村先生と素晴らしい教授陣に出会ったおかげである。私は当初の夢を実現させるべく創立40周年記念事業の一環として吹奏楽団を復活させ、今年で4年目、現在団員は33名で過日第3回目の定期演奏会も無事終了することができた。11月には本校創立40周年記念式典での演奏も予定されている。

さてここ数年、本学のみならず他大学も含めて教育実習生を見ているが、どうも目的意識が薄い学生が多くみられる。本当に教員になる気があるのだろうか？正直言ってただ免許だけが欲しくて実習に来るのであればお断りしたい。しっかりとした目標・目的意識を持って子供達を育ててくれることを願ってやまない。

平成14年度「火災予防運動」総合訓練

防火意識の高揚と防火管理の向上を図るため、防火管理規程「総合訓練計画」およびEMS教育計画の一環として、火災予防運動が9月25日（金）に大塚消火器（株）、宮代消防署のご協力を得て、本学の桜の広場および9号館南道路にて実施された。訓練は職員全員が消火器を使用し初期消火演習を行ったほか、消火栓操作による放水訓練も行われた。

すさまじい炎と煙は、訓練といえども恐ろしい

編集後記

▼はなやかな夏が過ぎ、学生が故郷から一斉に戻ってきた。とくに、Uターン就職を希望する者は、この夏期休暇中、忙しく就職活動に追われたのではなかろうか。就職は学生諸君には、ある意味で一生の問題であるし、四年生のご父母の皆様にとっては一番の関心事であると思う。なかなか厳しい社会状況ではあるが、希望する会社へ一人でも多く就職してもらいたい。

▼これらも含めて今大学は、学生へのよりきめ細かいサービスが強く求められている。その最大のものは、何と言っても高品質の教育がわかりやすく受けられ、一人一人の個性にあった形で付加価値として身につき、社会に送り出してもらえることであろう。

▼大学は、本年度全学を挙げて体制を整え、十二月末を目指し建学の精神にも踏み込んだ多方面からの点検・評価を行っている。この結果をもとにして、中・長期の施策を作り、継続的に改善を進めていくこととなる。このレポートは情報公開を前提に作成されるので、その節は貴重なご意見を頂戴したいと思っている。（F）

第6回技術教育国際フォーラム開催予告

主催：技術教育国際フォーラム協議会
（代表・日本工業大学理事長・大川陽康）

感性と教養

日時：平成15年2月11日（祝日）
13：00～
場所：有楽町朝日ホール
（有楽町マリオン11階）
講師：文化庁長官・河合隼雄先生

連絡先：
技術教育国際フォーラム協議会事務局
（日本工業大学　工業教育研究所内
木村寛治教授）
電話：（0480）33－7512（直）
FAX：（0480）33－7524（専）